

# 道徳 ジャーナル

- 21世紀 心の時代に  
知らないことを知ること世界は広がる  
越智貴雄……………1
- 座談会  
どうしていますか?道徳の授業・評価~後編  
川上孝生/須貝牧子/東風安生……4
- SDGs×道徳 ……………8
- どうなるこれからの道徳授業……………10

## 21世紀 心の時代に

### 知らないことを知る ことで世界は広がる

#### パラリンピックとの出会い

私が初めてパラリンピックに出会ったのは、今から二十一年前の二〇〇〇年シドニーだった。当時、大阪芸術大学写真学科の二年生で報道写真を撮影していた。新聞社で報道カメラマンの経験がある先生が「オリンピックは本当にすごい。世の中を変える力があるんだ」と授業で熱く語っていて、その話を何度も聞いているうちに、オリンピックに興味湧き、現地で撮影してみたくなり、大学を一年間休学し、アルバイトでためたお金を握りしめてオーストラリアのシドニーに渡った。

シドニーから新聞社に売り込みをして、運よくオリンピックの取材撮影に携わることになった。オリンピック選手の迫力や連日連夜のお祭

り騒ぎを肌で感じた。とても素晴らしい経験ができた。

興奮が冷めやらぬ中、帰国準備をしていると、新聞社から「パラリンピックの撮影もお願いしたい」という依頼が舞い込んだ。依頼されたことが嬉しくて、ふたつ返事で「ぜひ、撮影させてください!」と即答したものの、パラリンピック開幕が近づくにつれて、不安がどんどん膨らんでいった。

当時の私は、パラリンピックをほとんど知らず、「そもそも障がいのある人にカメラを向けていいのだろうか? 失礼にあたらないのか?」。そんなことをぐるぐる考えていた。

しかし、その根拠のない不安は、パラリンピック開会式の入場行進で選手たちの姿を見たときに吹っ飛んだ。

どの選手もはじけるような笑顔で行進してい



写真家  
越智貴雄

たのだ。特に、両足を切断した選手が、逆立ちの状態でも左手だけでジャンプ・跳ね、右手で観客に手を振りながら行進する姿には、驚嘆した。

そして翌日から始まった競技を見て、さらに驚いた。義足をつけた選手が百米メートルを十秒台で駆け抜け、走り高跳びでは、右足の太ももから下を切断している選手が片足一本だけでケンケン助走をして一米メートル八十七センチメートルを跳んだ。車いすバスケットボールでは、車いす同士が激しくぶつかり合い、時には車いすが宙を舞ってひっくり返る。僕の想像をはるかに超える世界が目の前にあった。人間のもつ潜在能力の高さと可能性に驚き「人間ってすごいな！」と興奮の連続で、無我夢中でシャッターを押し続けていた。

### パラリンピックを撮り続ける理由

帰国後、銀座でシドニーパラリンピックの写真展を開催した。その時来場された方が写真を見ながら「こんな激しそうなスポーツをして、障がいがいより重くならないんですか？ かわいそう！」と言われた。

その言葉に私は大きなショックを受けた。現地で感じたパラリンピックの興奮やパラアスリ

ートのカッコよさを、写真で伝えることができていることが悔しくて、さらに被写体のアスリートに対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

それからは大会があると聞くと、積極的に撮影しに行くようになった。大会を追いかけるようになると、車いすの選手や両足義足の選手たちとの出会いも増えていき、ますます彼らの魅力にひかれるようになった。国内の大会はもちろんのこと、海外の大会まで撮影に行くようになっていった。

### パラスポーツ専門メディアを設立

気が付くと二〇〇四年頃には、パラアスリートの魅力にどっぷりと漬かっていた。その頃不満に思っていたことは、パラリンピックの露出がオリンピックに比べて極端に少なく、内容も記録や大会の表面的な情報ばかりで、選手やパラリンピックの魅力を存分に伝えてくれるメディア媒体がほとんどなかったことだった。

そこで二〇〇四年四月、パラリンピックスポーツの専門メディア「カンパラプレス」を立ち上げた。「カンパラ」には、パラリンピックを先入観なく五感で感じて欲しくて「感じるパラリンピック」という意味を込めている。

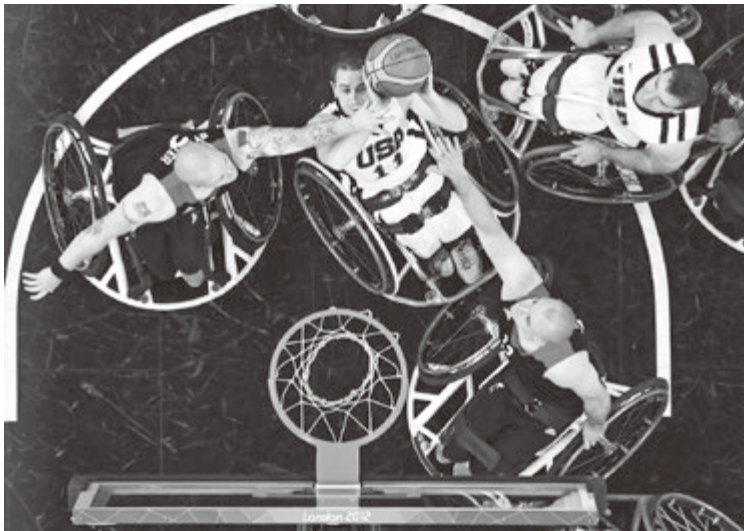


義足のロングジャンパー、マルクス・レーム選手（ドイツ）。8メートル48センチメートルの世界記録を持つ。

パラリンピックのスポーツとしての面白さや迫力、選手の生き方や情熱を伝えることを目指し、本格的に取材していくうちに好きな選手や応援したい選手がどんどん増え、日本人に限らず世界中の素晴らしい選手を取り上げるようになっていった。

### 変わってきた撮影スタイル

パラリンピックを撮り始めた頃は、障がいの



車いすバスケットボール

ある部位を写さないと、パラリンピックの写真だと分からないとメディアから言われることが多く、写真には必ず義足や車いすなどを入れて撮影するようにしていた。しかし、選手を撮影すればする程、そんな意識は薄れていった。選手との信頼関係もどんどん深まり、選手のおさや癖などが分かってくると、選手のパフォーマンスや表情を中心に撮るようになっていった。大会前には、「どんな走りをするだろうか?」「ゴールはどんなポーズかな?」「太陽の位置と

光は?」と頭の中で何十通りものイメージを考える。そのイメージを、試合が始まるまでにどんな絞り込み優先順位をつけていく。撮影現場で、新たに撮りたいシーンが湧き上がってくることもある。それらを常に一瞬一瞬、感覚を研ぎ澄まして取捨選択しながら撮影するのが、私の撮影スタイルだ。

### パラスリートの魅力とは

「なぜ、パラスポーツを撮影するの?」とよく尋ねられるのだが、それはつまり、体に障がいがある、周りの人からは「できない」「無理だ」と思われることに、勇気を出して挑戦したり、やっつけのけたりする姿にひかれるから。

パラスリートは、障がいの箇所も程度もみんな違うので、自分で最適な方法を見つけだしていく。だれとも違う、自分だけの道なき道を作り続ける姿が、とてもカッコいい。彼ら彼女らの行動と発信は、どんどん新しい道を作り、まるで開拓者のおうであり、発明家のおうでもあると私は思っている。

最初の頃は、義足や車いすを見るだけで、毎回ドキッとしていたことを覚えている。見慣れないものを見たからなのか、見ることが相手に失礼だと思っていたからなのか。しかし、取材

を重ねてアスリートたちに接する機会が増えていくにつれて、その感覚はどんどん薄れていった。そしてそれと反比例するように、選手の性格や個性、情熱を感じることがだんだん増えていった。

最近では、街で車いすや義足を見かけると、まじまじと見つめながら「これは最新の素材なのかな?」どこのメーカーだろうか? いくらかなあ?」と考えてしまう。あまり見かけないとても珍しい物を見ると、思わず声をかけて尋ねることもある。

パラリンピックの生みの親と呼ばれる、グッドマン博士は、障がいのある人たちにこう言った。「失ったものを数えるな。残されたものを最大限に生かせ」と。

しかし、障がいのある人の失ったものを数え、彼らの限界を決め、勝手な先入観と思いつきをもっていたのは、私の方だったと気付かされた。

私がパラリンピックに出会い、世界が広がったように、皆さんの見ている世界が、もっと、もっと広がりますように。この世界には、私たちが思っている以上に、まだまだ知らない世界がたくさん広がっているのだから。

(おち たかお)



〈座談会〉

どうしていますか？

# 道徳の授業・評価く後編く

神奈川県相模原市立淵野辺東小学校

校長

**川上 孝生**

東京都練馬区立中村中学校

主任教諭

**須貝 牧子**

横浜商科大学

教授

**東風 安生**



前号に引き続き、今回は「評価へつなげる授業づくり」について、三人の先生方のお話をお届けします。

——道徳科の授業の課題、改善点についてどのようにお考えですか？

**川上** 教科化以降気がかりなのは、評価を意識しすぎた授業になっていることです。どの学年、どのクラスでも授業展開、板書がパターン化していて、学校全体で決められたマニュアルを基準にしていると思われる授業や、記述の時間をやたらに取る授業が散見されます。評価を

意識しすぎて形式主義的にならないか心配です。授業の始めにまず「今日のめあてはこれです」と板書し、型通りの発問をして、残り十分で「今日の学び」を板書して児童生徒が書き写す。このスタイルだと誰でも同じように授業ができますが、パターン化して面白みがありません。

道徳は学級担任や学級の個性が発揮され、児童生徒たちの本音が飛び交い、ときには收拾がつかない授業があってもいいのではないかと思います。道徳科の授業は、指導者と児童生徒の信頼関係が大きく影響します。子供たちが遠慮なく思っていることを言い合える学級づくりが土台になって、豊かな学びが展開されるのです。

話し合いが深まっていないのに、授業の残り時間が十分になったからといって振り返りや感想を書かせて学びを深めることができるでしょうか。「考え、議論する道徳」の授業成功の秘訣は中心発問と学習課題だと思います。

**須貝** 多面的・多角的な授業を展開するためには、児童生徒が多面的・多角的に考えることができる場をつくらなければなりません。どの教科でもグループによる話し合い活動を取り入れています。特に道徳科ではほとんどの授業で取り入れているでしょう。その際、最も重要なのは発問です。子供たちが意見を言い合って



「そうだよね」(その意見と)同じです」で終わってしまったらグループで話す意味がありません。児童生徒たちから多様な意見が出そうな発問を準備しておくことが大切です。

すると授業で子供たちから想定を超えた意見が出てきて「なるほど。そういう考え方もあるね」と、さらに話が広がっていきます。豊かな授業展開にはいろいろな意見が想定される発問作りが欠かせないと私は思います。発問によっては子供たちの話し合いが面白くなりますし、児童生徒が自分自身と向き合っている様子うかがうこともできます。

**東風** 私は、授業の中にどのように評価を取り入れていくかをお伝えしたいと思います。指導案には指導上の留意点と評価のポイントを記入しますが、この点を重視するあまり、評価項目をたくさん入れすぎると、評価のための授業になってしまふ恐れがあります。また、ただワークシートを書く時間になっては道徳の授業として面白くありませんし、目指すべき道徳の学びから遠のいてしまいます。

では、どうしたらよいか。評価とは測定と情報収集と教育的価値の意味に大別できると話しましたが(前号参照)、評価を生かすことで教

育的価値をもたせるのだとしっかり理解することが大切だと思います。

例えば、内容項目「思いやり」の教材の場合、授業の始めに子供たちに自分が考える思いやりとはどんなことを書かせて、授業の最後でまた同じことを質問すると、内容に変化が表れていることに気付きます。その変化について、子供自身が評価するのです。学びによって自分の変化を確認する自己評価という活動です。

ほかに、隣の席の人と話し合うペア学習やグループでの話し合いのときに、互いに評価し合うという活動もあります。話し合いの活動自体は情報収集にあたるものですが、自己評価で自分の中で起きた変化を確認し、相互評価で自分に対する客観的評価を確認するという点で教育的価値が生まれます。「評価は教師だけがするものではない。子供たち自身がするものもある」と、もっと柔軟に考えて授業づくりに生かしてほしいと思います。

### 授業の構造化と準備を綿密に

——評価のポイントを実践するために、授業で工夫すべき点を教えてください。

**川上** 評価にあたっては、「一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか」

「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか」を重視することが重要であると『学習指導要領(平成二十九年告示)解説 特別の教科 道徳編』にあります。児童生徒が、意見を出し合い「そういう考え方もあるよね」と友達の話に耳を傾けつつ「でも、私はこう思う」と自分の意見を交えるプロセスが「多面的・多角的」と言われるものですし、「自身自身の関わりの中で深める」とは「あなただっただろうのか」という意味ではなく、場面発問から登場人物と自分の思いをそれぞれ深めた上で心理解へに進むものだと思います。

児童生徒から、振り返りが難しくて記述できないという声が挙がるという話を聞きますが、自分で考え議論するような授業でなければ振り返ることはできません。授業展開の中で「多面的・多角的な見方へ」つながり、「自分自身との関わりの中で深める」学習活動が設定されていること。これさえあれば、評価は簡単です。ただしそれには綿密な教材分析が欠かせません。中心発問・学習課題、そして道徳的価値を深める基本発問を柱に据えて、一時間の授業をしっかりと構造化することが必要です。

**須貝** おっしゃる通りですね。つまり、教師が「この授業で深めたいことは何か」というビジョンをしっかりと持っているかどうかです。授業



東風安生先生

を通して、何を深めていきたいのか、そのためにどのように話を切り込んでいくか。この点をしっかりと把握して授業に臨むことが大切です。

言い方を変えると、道徳科の授業が終わったときに、児童生徒自身が自分の変化や気付きが得られる授業を目指したいと思っています。子供たちがたった一時間の授業の中で考えを深めて大きく変容していくことはないでしょうが、それでも「(この授業で)いろいろな考えられて面白かった」と思えるかどうかが大切です。

最近、私は授業前にアンケートを行っていますが。授業の一週間ほど前に、生徒にとって教材と関わりのあることを一つ聞きます。それは本質的なことで、例えば内容項目「思いやり」なら、「自分が考える思いやりとはどんなものか」を簡単に書いてもらいます。集めた意見を紹介しながら授業を行うと、考えが深まったとき「授業を受けて、最初に思っていたことからさ

らに新しい気付きや学びがあった」という意見が生徒から返ってきます。

また、子供自身が学びや心の変化を可視化できるように、事前アンケートを貼り付けて授業の終末での思いと対比できるワークシートを作るのもおすすめです。

**東風** 授業の目標と授業内容、指導法、評価というものが基本的には他教科では一致していませんが、道徳科の場合には安易に評価できないのが難しいところです。それを踏まえた上で、授業一コマずつではなく、一定の期間を通して子供の道徳性の成長を見ることが大切です。

私は、教師を目指す学生たちに教育実習では必ず道徳科の授業をするようにと伝えます。すると学生たちは「指導案の作り方を教えてください」と言ってくるので、道徳科の指導案作りについて話します。ねらいの検討、指導の重点の明確化、教材分析、学習過程（発問と指導上の留意点）などをしっかり準備するように伝えるとき、学生たちはそこでようやく道徳授業でのチェックポイントを理解できるわけです。

教師が自分の価値観ではなく、指導の基本をしっかりと押さえ準備した上で、評価のポイントを実践して授業を進める必要があると思います。

### 子供たちの本音が引き出せる授業を

——ワークシート以外に、子供たちの様子を知らするためにどんな手立てや工夫がありますか。

**川上** 二点ご提案します。一つ目は、学級担任以外による道徳の授業です。学年間でのローテーション授業や、校長や教頭が授業をして、学級担任が、児童生徒の発言やうなずき、表情を観察し、記録することは有効だと思います。

二つ目は、意思が見える化・スケール化する道具の活用です。言語活動が苦手であまり表現できない児童生徒には、自分の意思が見える化できる道具を用意することが有効です。

例えば、登場人物の言動に同情・共感、弁護、批判、中立などの自分の考えを示すためのカード（前号参照）の利用や、黒板にスケールを提示して、自分の名前を書いたマグネットを貼って心情を示す活動も有効です。



須貝牧子先生





特別支援学級で使っている人形（『11ぴきのねこ』〈こぐま社〉のハンドパペットを使用）

特別支援学級では、役割演技や体験型学習を通して表現させて、心の動きを確認する方法を行います。二つのパペット人形を使って、一方は困ったちゃん役、もう一方は困ったちゃんを見て考え悩む役として、人形劇をビデオで事前収録し、授業中に子供たちに見せて、人形たちと一緒に考えていく方法も行っていきます。

言葉で表現できない子供の場合は、人形に対する態度、例えばなでて慰める様子、心配するそぶりなどが評価の対象になります。特別支援学級の道徳科の授業は通常級で行われているものとは異なり、授業の前後で大きく内容を切り替える必要があります。例えば、内容項目「節度、節制」の授業では、授業の後半では机を後ろに寄せて、子供たちに自由遊びをしてもらい

ます。そして、終わりの時間になったら「きれいに片付けましょう」と言ったら、きちんと片付けができるかどうか。このように、日々の生活で実践されていくことに大きな意味があります。このような授業方法は、文章化、言語化が難しい子供たちに対して有効です。

**須貝** 中学校では、TT（ティーム・ティーチング）は大きな力になると思います。ただ、毎回TTはできないので、担任一人で授業を行う際は、小グループでの話し合いを有効活用し、生徒の発言や様子をしっかりと観察することが大切です。ときには話し合いに入っていく、話を深められそうな話題を出したりアドバイスしたりしながら子供たちの表情を見て記録します。

話し合いでは積極的に意見を出しているのに、ワークシートでは話を簡潔にまとめている、記述が不十分な生徒もいるので、話し合いの様子を丁寧に見取ることが大事です。

**東風** Society5.0の時代を踏まえ、デジタルの



川上孝生先生

視点で考えてみます。今後は、ICTをもっと積極的に取り入れるべきだと思います。クラス内イントラネットを用いたチャット機能は、有効活用できると思います。

先生とクラス全員、または状況に応じて個別にメッセージを交わすことができ、記録も残るので、相互交流の網の目はますます広がり、情報分析に活用できます。さらに、ICTは効率化を図る点でも大きな役割を果たします。フォーマットを作成し、そこに子供自身が記録していけば、期間を限定すれば教師がその間の子供の成長を確認したり、一覧から特定項目を切り取って確認したりと、いろいろな角度で分析を行えるでしょう。ICTの良い面をもっと取り入れていく必要があると思います。

**川上** 今の教科書には東日本大震災についての教材がありますが、今後は新型コロナウイルス感染症予防対策に関する内容が道徳の教材に登場するかもしれません。世の中は常に変化していくものなので、どんな出来事もよききっかけとして捉えて授業に取り入れていくことが持続可能な取り組みと言えるでしょう。

道徳を通して子供たちの成長を見取り支えていくためにも、時代の変化に柔軟に対応し、テクノロジーを活用しながら、子供たちと向き合う姿勢を高め合っていきたいものです。



水源地を訪れ水温を測る

## STAGE II

JICAルワンダとの学習の中で、「都祁の宝物」である水と地域の特産品を組み合わせ、世界の水問題の解決に貢献できないか探った。児童たちは、水源地の水と特産品のお茶を使って「グリーンティー」を作り、参観日に保護者に販売して、その収益をルワンダの井戸造りのために募金することを計画した。

### 縦軸 (AXIS $\alpha$ )

- ・都祁の特産品のお茶について学ぶ。
- ・地域で茶葉を栽培する「健一自然農園」の伊川さんに協力してもらい、都祁の水に合う茶葉のテイスティングをする。

### 横軸 (AXIS $\beta$ )

- ・学んだことや感じたことを多くの方に伝えるために、パンフレットやポスターを作る。
- ・同じく水問題に取り組む鹿児島県屋久島市立八幡小学校とオンラインで交流を行う。



何種類ものお茶をテイスティング

## STAGE III

学習のまとめとして、鹿児島県屋久島市立八幡小学校とともに、水問題について考える「水サミット」を開催した。

### ●おわりに

近年IoTの導入が進み、様々な「もの」がネットワークでつながった。これからも進むであろう技術革新の中で忘れてはならないのは「人は感性をもった生き物であり、その感性を幼少期に思う存分育むこと」。これは、本校が学習活動を計画する上で最も大切にしてきたことである。

そうした教育活動で学んだ児童たちは、多文化共生社会の中で生きるための人権道徳意識や、他国の人々や文化について理解し、日本人としての自覚をもって国際親善に努める「持続可能な社会の創り手」として頼もしい成長を遂げるだろうと期待している。今後もさらなる高みを目指し、教育活動をアップデートしていきたい。



奈良市立都祁小学校 <http://www.naracity.ed.jp/tsuge-e/>

### ●都祁小学校の実践のポイント

都祁小学校では、地域と世界、自分と他者をつなげる学習活動、そして知識を深めるだけでなく、五感で感じたことから児童一人一人が自分たちにできることを考え、行動につなげる学習活動を行っています。また、これらの活動を全校（ホールスクール）で実践している学校です。

社会で起きていることを全校朝会で紹介するなど、授業以外でも常に「世界・社会」を学び、「世界の中の自分」という意識づけを行なっています。児童が学びに没頭するための仕掛けとして、実際に何かを作り、製作物を外に向けて発信したり、資金を集めて国際支援に使ったりといった実社会につながる活動を中心に行っている点も特徴的です。

都祁小学校がホールスクールで実践できている理由の一つに組織体制が挙げられます。カリキュラム・マネジメントチームを置いた推進体制の強化、教員間の連携を促す体制、そしてスクールリーダーのバックアップができています。SDGsの目指す「持続可能な社会」という目標に対し、教員間の視座・視点を合わせることで、新たな取り組みを応援する姿勢、その実践で成功したこと、課題点を次につなげるといった、組織的にチャレンジしやすい環境づくりが特筆すべき点です。教員が失敗から学ぶことを許容し、悩みながら前に進むことをよしとする組織文化が革新的な実践につながっています。

「持続可能性」を扱うときに、地域学習・郷土学習は非常に相性がよいといえます。しかし、地域や日本の「持続可能性」を考えるに留まってしまう、あるいは「地域」と「世界」を切り分けた学習になってしまいがちです。

SDGsが目指す視点は世界であり、「Think Globally, Act Locally」の実践が求められています。世界で起きていることが私たちの日常とどうつながっているのか、自分たちは何ができるのか考える必要があります。「世界」と「地域・自分」をつなげ、試行錯誤を重ねながら行う活動として、都祁小学校から学ぶ点は多いのではないのでしょうか。

一般社団法人グローバル教育推進プロジェクト (GiFT) 調査・研究統括 木村大輔



# SDGs× 道徳

連載 第5回

## ●はじめに

都祁は奈良市の北東部にある大和高原の中央に位置し、豊かな自然に囲まれている。大和高原最大の前方後円墳や、かつてこの地域で作られていた凍豆腐を平野部に届けるための、何十キロメートルにも渡る安全索道（ロープウェイ）など、興味深い地域遺産が多く存在する。そんな地域をポジティブに捉えるために、道徳科や生活科、総合「なら」科のカリキュラム・マネジメントを図り、6年間を見通した教育活動を展開している。

地域をポジティブに捉えるために、本校が大切にしているのは次の視点である。

- 郷土のよさを調べて発信（プレゼン等）するだけでなく、得た情報を基に、持続可能な社会として、くらしの課題と改善点を考える。
- プレゼンの聞き手も自らの生活に目を向け、都祁のよさを感じるためには、どのようにすればよいのかを考える。

## ●本実践と道徳との関わり

小学校学習指導要領では、道徳教育を進めるにあたって、「各学校においては、児童の発達の段階や特性等を踏まえ、指導内容の重点化を図ること。その際、各学年を通じて、自立心や自律性、生命を尊重する心や他者を思いやる心を育てることに留意すること。」（総則 第1章第6の2）とされている。本校においても、このことを踏まえながら、「SDGs×道徳」をデザインした。

### ○育みたい力

- ・郷土のよさを愛する心（郷土愛）
- ・互いの考えを受け止め、協力し合える力（相互理解）
- ・「正確性」を基にした伝える力（情報リテラシー・情報収集能力）

これらの力を育むために、縦横二つの軸（AXIS）とそれを包み込む球（SPHERE）をイメージして教育活動を展開している。

### 縦軸（AXIS $\alpha$ ）……6年間を系統立てた教育活動

五感で感じ取ったことを素地に、確かな情報を取捨選択し、地域や社会の課題に取り組む態度を育む。

## SDGs実践紹介①

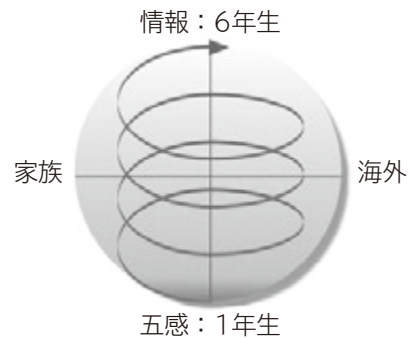
# すてきいっぱい 都祁の郷

奈良市立都祁小学校 教頭 岸下哲史

横軸（AXIS $\beta$ ）……社会とのつながりを意識した教育活動  
学びの発信先を広げることで、社会で生きる人間として、社会をよりよくしようとする態度を育む。

### 球（SPHERE）……多様な課題に触れる全校朝礼

毎週1回時間を設けて、多様な文化や考え方に触れ、グローバルな社会で生きるための素地を育む。



## ●実践例

『すてきいっぱい都祁の郷：都祁の宝物で 世界の宝物を』（第4学年）

### （1）ねらい

大和高原に降った雨は、布目川（奈良県）、木津川（京都府）、淀川（大阪府）を流れ、流域の人々のくらしの向上を支えてきた。川や水源地を校区の宝物と捉え、4年生で取り上げた。

### （2）主な学習活動

#### STAGE I

##### 縦軸（AXIS $\alpha$ ）

- ・水源地を訪れ、五感で水を感じる。
- ・pHや透明度を測定し、水源地の水を身の回りの色々な水と比べる。

##### 横軸（AXIS $\beta$ ）

- ・外国語学習の時間に、JICAルワンダの協力のもと、世界の水事情について学ぶ。

##### 球（SPHERE）

- ・「いじめ防止教育DAY」や「国際理解DAY」というテーマで全校朝礼を行い、世界の現状や課題について学ぶ。

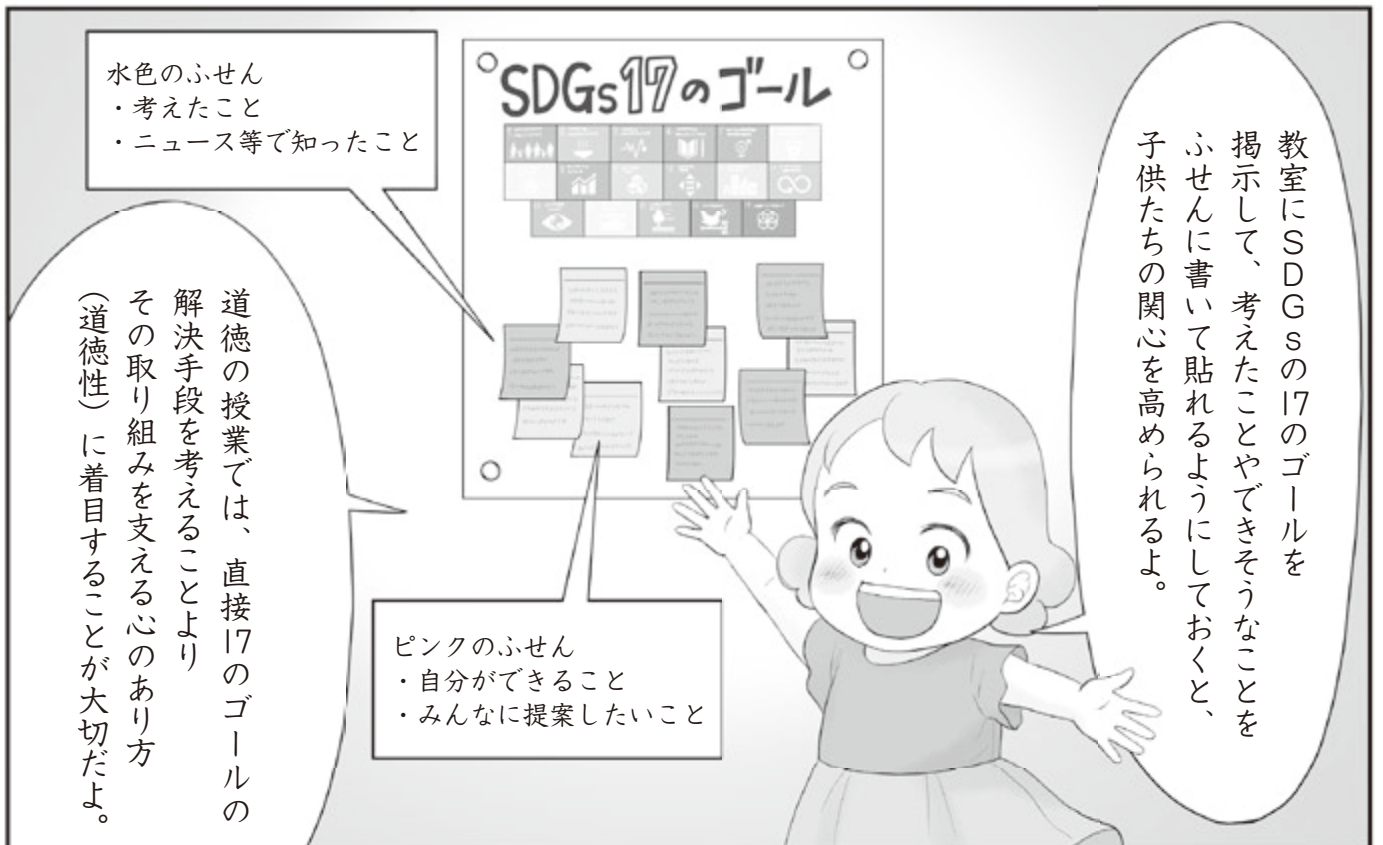
# どうなるこれからの道徳授業

連載11回 SDGs編

とくちゃん

監修・法政大学兼任講師 廣瀬仁郎先生  
マンガ・のはらあこ

学先生



②自分事として考える

①問題意識をもつ

SDGsを道徳の授業で扱うときは、主題に合った身近な事柄から問題意識を高めていくといいよ。

例えば「節度、節制」の内容で給食の残食みために身近な問題を取り上げれば、自分のこととして考えられるね。

とくちゃんは残さなそう！

理科 自然環境



社会 産業



③他教科と関連付ける

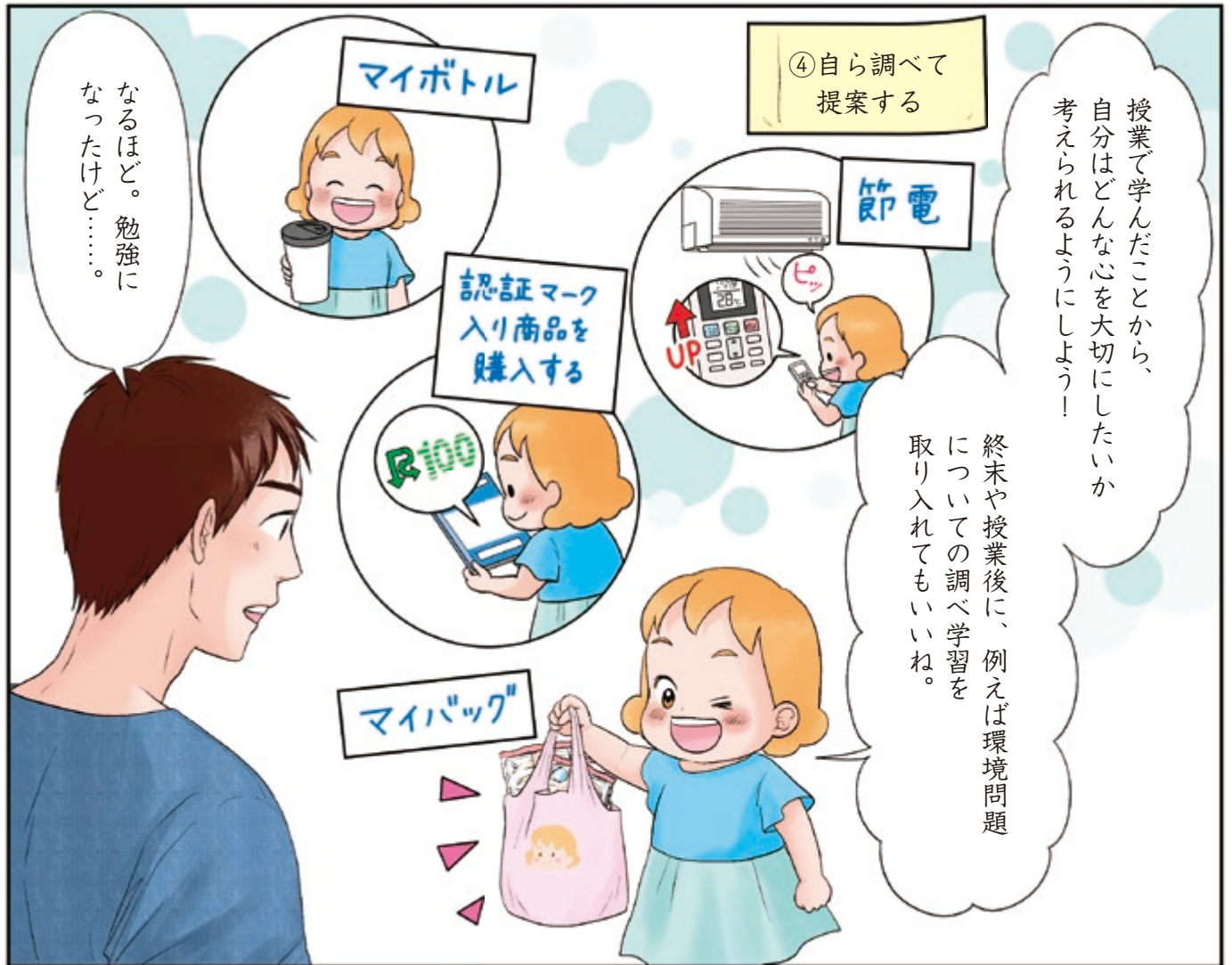
SDGsは一つ一つのゴールがつながりあってるんだ。いくつかの教科で学習したことと関連付けて授業を多面的・多角的に深めていくことも大切だよ。

そう！SDGsは学校全体で連携して取り組むことがとっても大事だよ。

連携

他教科との関連ってなると自分一人じゃ難しいな。





道徳ジャーナル109号 令和3年5月発行

発行所 株式会社学研教育みらい 発行人 甲原 洋／編集人 木村友一

本誌のお問い合わせ先…小中教育事業部 〒141-8416 東京都品川区西五反田2-11-8

内容については…TEL (03) 6431-1565 (編集) それ以外のことは…TEL (03) 6431-1151 (販売)

「学研 学校教育ネット」 <https://gakkokyoiku.gakken.co.jp> ●「道徳ジャーナル」のPDF版および電子版は、WEBページから。

9300007570